

## 1 めざす子どもの姿を求めて

### (1) 本質および基礎・基本の見直し

昨年度私たちは、音楽科の本質を「音や音楽へ自らかかわり楽しむこと」とらえた。しかし自らかかわることは、音楽を学ぶ中で培われると考え、今年度は、「音や音楽の世界の楽しさを味わうこと」と改めてとらえることにした。そして本質に基づく基礎・基本を「楽しさを感じながら自分の音楽的感性を高めていくこと」として研究をすすめることにした。

ここでいう「楽しさ」とは、子どもが音楽にかかわる活動（以下、音楽的活動）をする（音楽を学ぶ）過程で感じる心地よさ、感動、達成感、充実感、などをさし、音楽を学ぶ上で欠くことのできない感覚であると考えている。

### (2) めざす子どもの姿

上記の考えに立った上で、次のような姿を音楽科で求める子どもの姿としていく。

音や音楽に素直に反応し音楽的に高まろうとする姿

私たちは、子どもが自分の周りにある音や音楽に素直に反応してほしいと考える。それにはまず、自分の周りに様々な音や音楽があることを感じ取り、それらが自分にとって心地よいものかそうでないものかを聴き分け、心地よいものに心を向けてほしい。それが「素直に反応する」ことととらえる。

子どもが心地よいと感じた音や音楽を、子ども自身が受け入れ、自分のものとしてさらに心地よく美しくなるよう働きかけていくことが、「音楽的に高まる」ということである。そしてそれは、子ども同士が互いに自分の感じたことやこうしたいと思ったことを表現や鑑賞を通して共感し、交流しあう中で実現されていく。私たちが本質や基礎・基本でうたっている楽しさは、音や音楽の心地よさや美しさを、友だちと一緒に、ときには一人で試行錯誤しながら追求していく中にあると考える。その追求の過程が音楽科の学習である。

音楽的に高まろうとしている姿を具体的に挙げてみる。

〈表現領域において〉

- ・伴奏に合わせて気持ちよくのびのびと歌っている
- ・それぞれの思いで音遊びを楽しんでいる
- ・歌に合わせて自由なリズムで打楽器の伴奏をしている
- ・イメージに合わせてリズム伴奏の工夫をしている
- ・情景を想像しながら演奏している など

〈鑑賞領域において〉

- ・体を反応させながら聴いている
  - ・身体表現しながら聴いている
  - ・情景を思い浮かべながら聴いている
  - ・よさを見つけながら聴いている
  - ・自分の演奏と聴き比べている など
- このような姿が「音楽的に高まろうとしている姿」であると同時に、楽しさを感じている姿でもある。

このめざす姿を実現するには、子ども一人一人の音楽に対する自発的な取り組みが求められる。

そこで次に、音楽科における自発性のあらわれについて考えてみる。それは、子ども自身が音楽科の授業の中で、心地よい、美しいと感じた音や音楽のある世界に自ら働きかけていくことととらえる。つまり、美しく豊かな表現を求めて自分なりに考え、工夫しながら表現や鑑賞の活動に取り組むことである。

具体的には、ただ与えられた楽譜通りに演奏するのではなく、そこに作詞者や作曲者の思いや意図を感じ取る、自分の好きな箇所を見つける、自分なりのこだわりをもつなどの意図のある表現や鑑賞の活動である。

これらの活動は、子ども同士がイメージを共有したり、想いを交流したりしながら互いのよさを表現や鑑賞の仕方に生かす中で行うことが大切であると考えられる。

心地よい音や音楽のある世界に自らかかわりそのよさを友だちと一緒に見い出していくことに楽しさを感じて自分を高めていく姿を、めざす子どもの姿とした理由はここにある。

## 2 めざす子どもの姿に迫るために

これまでの実践を通して、思い通りに表現できなかったと反省する子どもの言葉を分析すると、上記の「考え、工夫する」ことに対して次

のような様子が見られた。

- ・正しく演奏するのに精一杯である
- ・工夫はしたが、その練習が不十分である
- ・工夫できないようなことをしようとしている
- ・イメージとの結びつきが弱く工夫の意義が見出せない など

そこで今年度は、単なる練習と工夫との違いを明確にし、工夫が自分なりにできるような機会や場を十分に与えることでめざす子どもの姿に迫りたいと考えた。

### (1) 一人一人の音や音楽への働きかけを促す

クラスの実態、できれば一人一人の子どもの実態を把握した上で「こんな楽しさを経験させたい」という願いをもって教材を決定する。それには、子どもがこれまでにどのような音楽的経験をしているか、音楽的スキルが、どのくらいなのかを指導者がつかむことが大切である。また、指導者自身がその教材曲あるいは原曲に感動し、そのよさを子どもと共に味わいたいと意識して指導にあたることのできるような教材でありたい。

その上で、子どもが大きな魅力を感じ、その後の音楽的活動に主体的に取り組むことができるような、教材との出会わせ方を工夫する。たとえば、さまざまな編曲による教材曲を鑑賞させる、イメージをつかみやすいように映像を見せる、演奏に使われている、珍しいあるいは本物の楽器を見せるなどである。

### (2) 音楽的活動の場を保障する

私たちが求める子どもの姿が、音楽的に高まろうとする姿であることは先に述べた通りである。そのためには、音楽的活動の場を十分に保障しなければならない。自分の想いを音で確かめる、音を通して友だちと交流・共感する、音そのものの音楽的価値に向かって様々な試行をするなど、一人一人の音や音楽にかかわる活動を可能な限り保障したい。

上記の活動の中には、単調な反復練習に見える技能習得の場を保障することも含まれる。それは、子どもが自分の表現へ向けた想いを実現しようとしたときに必要とされて初めて有効な場となる。私たちは、子どもが必要を感じて求めた時に最も効果的に技能習得の指導ができると考えている。

同じように楽典的要素についても、必要とされたときに学習することが、子どもにとって意義あるものとなる。

### (3) 互いの考えや表現を聴き合う場を設定し 自分の表現の見直しを促す

自分だけの想いが一人歩きをして、他と相容れない表現になってしまうことのないよう配慮

したい。それは、楽譜の読み違い、特性だけに目を奪われた楽器選び、友だち関係にこだわったグループづくりなどをすると起きることがある。

そうならないために、同じ想いをもつ子同士のグループを作る、表現活動の前にイメージを話し合う、表現活動の途中で互いの演奏を聴き合う、発表会を開きお互いの演奏を聴き合い認め合う、などの場を大切にしていきたいと考える。それぞれの場で、互いの想いをもとにした表現の交流を図ることによって、新しい表現方法に気づいたり、自分の想いがより鮮明になって、さらに心地よく美しいと感じる表現をつくり出していくことができるようになるだろう。

これらの交流が、一人一人にとって意味のある活動となるように、また一人の子どもの想いが集団の中で埋没しないように、グループ内の話し合いを重ねたり、個々の想いを記録したりする。

その時には、互いの考えや表現を認め合おうとする姿勢が何より大切である。とかく技能が優れている子どもの考えにおされがちになることが多いが、どんな意見も尊重することの大切さを子ども自身が忘れないように配慮したい。

### (4) 自己評価、相互評価などを通して

#### 自分の表現のよさの自覚を促す

一瞬で消えていく音や音楽を言葉だけで評価し尽くすことは難しい。そこで、その時間の課題ごとに音や音楽でふり返る場をできるだけ多くもっていきたい。習熟した技能を自分で確かめるだけでなく、表現がさらに心地よくあるいは豊かに美しくなったことを聴き合い認め合うことによって、次の課題への意欲につなげていくことができると思われる。

その際に録音や録画を取り入れるのも有効な方法の一つである。ただしそれらは大変客観的かつシビアに評価されがちである。その扱い方については、子どもの不安を解消するためにあらかじめ評価の観点を決めておくなど心情的な面への配慮を心がけたい。

教師の評価は、到達の様子を明確に示し、子どもに満足感を与えるのに有効な評価である。子どもの自己評価や相互評価にワンポイントアドバイスを適宜教師から行うことで子どもが自分のよさを自覚し、さらに豊かな表現へ向かっていくことができるようにしたい。

これらの評価を活動の場や子どもの実態に応じて適宜組み合わせることで、子どもが自分の音楽的活動に自信をもち、自分の音楽の世界を築いていくことができるようになることを望んでいる。

### 3 実践例 — 6年 —

#### (1) 題 材 すてきなハーモニー ～「クリーゲルのメヌエット」を中心に～

- (2) 目 標
- ・音の重なりがつくる和声のひびきに関心を持ち、積極的に演奏や鑑賞に取り組むことができる。
  - ・ひびきの美しさや曲のつくりのおもしろさを感じ取り、音色やバランスを工夫して、自らの演奏をより美しくしようとすることができる。

#### (3) 指導にあたって

##### 本題材におけるめざす子どもの姿について

本題材での基礎・基本を、リコーダーのアンサンブルの楽しさを音の重なりのおもしろさとして感じとり、より美しいひびきを求めようとすることとらえた。

子どもがこれまでに学習した「風になって」が、旋律線が掛け合いをしたり重なったりする二部合唱の曲であったのに対し、つづくこの「クリーゲルのメヌエット」（ひびきの異なる数種のアレンジによるものを含む）は、リコーダーでいろいろなハーモニーを楽しむことができる教材である。

アンサンブルの学習では、間違えないで演奏しよう、きちんと合わせようというだけの練習になりがちである。本題材では、音の重なりや曲のつくりにも注目し、工夫やこだわりをもって表現や鑑賞の活動をする姿をめざす子どもの姿としてとらえる。その工夫やこだわりの中で楽しさを感じ、音楽的に高まることを期待している。

##### めざす子どもの姿に迫るために

##### ① 音楽づくりに興味を持ってかかわるための働きかけを促す

「風になって」で学習した二声のひびきと比較すると、「クリーゲルのメヌエット」はリコーダーの曲であること、三つのパートがあること、短調であることなどがこの教材におけるハーモニーにかかわるの学習のポイントである。ここでは、楽譜とそこからうまれるひびきに興味・関心を持たせて、活動への意欲を高めるために、教師が同じ編成でアレンジした楽譜を数種用意した。

そして友だちや他のグループとのひびきの相違点や共通点などに関心を持ちながらも、自分たちの音楽という意識で、音楽づくりに積極的にかかわってほしいと考える。

##### ② 課題をもった音楽的活動をする場を保障する

その曲を正しく演奏できるかどうかは一人一人の子どもの技能にかかわることである。しかしアンサンブルとしての課題を見つれたり曲想にあった表現を考えたりするには、楽譜をもとに話し合い、互いの音を聴き合う時間も必要である。グループ活動が個人練習や単純な合わせばかりでなく、ステップを踏み、課題を持った有意義なものになるように、適切に支援しながら、時間や場所を保障したい。

##### ③ 音の聴き合いやひびきについての話し合いを通して表現の見直しを促す

アンサンブルをより美しいものにするためには、聴き手や演奏者自身が互いに観点を持って聴き合うことが大切である。そのためには旋律線に注目させる、曲の一部分だけをとり出して掘り下げる、他のグループのひびきを聴き比べてみるといった手だての工夫が必要であろう。そうすることによってあとの練習のポイントや工夫がみつけやすくなり、そこからより豊かで美しい表現へとつながっていくと考えている。

##### ④ 自己評価・相互評価・教師による評価を通して自分の表現に自信をもたせる

演奏を聴き合う中での相互評価や教師のアドバイス、録音装置の活用など客観的な手だてを参考にしながらも、自分（たち）なりの思いや工夫をカードに記録していくようにする。そしてグループごとに別々のバージョンに取り組むことで、練習の過程が違っても音楽のおもしろさや活動の達成感を自分たち自身のものとして感じるができるだろう。その満足感が自分の表現のよさの自覚であり、次なる音楽活動の自信につながるものと考えている。

学習計画（総時数6時間）

主な活動と内容	めざす子どもの姿に迫るために	評価のポイント
1 新出の音や難しい音の指づかいを知り 主旋律を吹くことができるように練習する	①②	短調の曲想を感じとり 主旋律を演奏することができる
2 グループ練習 I ＜パート分けをして 曲のだいたいが演奏できるようにしよう＞ ・アルトリコーダーもうまくなりたいな ・早く合わせてみたいな	②	
3 より美しくひびくように表現の仕方を考える ＜主旋律に注目してひびきを聴き合おう＞ ・主旋律の聞こえ方がちがうね ・それぞれのパートに役割があるんだ	②③④	それぞれのグループのひびきを聴き合って 自分たちの表現にいかそうとしている
4 グループ練習 II ＜主旋律と他のパートのバランスに注意しよう＞ ・旋律以外のパートは少し音をおさえてみようかな ＜グループごとの課題をつかんで練習しよう＞	②③	音色やバランスを工夫しながら演奏しようとしている
5 いろいろなひびきの「メヌエット」を楽しんで聴く ・音の重なり方によって いろんなひびきをつくりだすことができるね	④	曲想や和声のひびきに気をつけながら演奏したり鑑賞したりしている

(4) 本題材における授業の実際と考察

本題材でのめざす子どもの姿としてとらえた、音の重なりや曲のつくりにも注目し工夫やこだわりをもって表現や鑑賞の活動をする姿に迫るためには、ひびきを聴き合い、表現の仕方の見直しに目を向けさせることが中心的な手だてとなる。そのような場を効果的に設定できるような題材の構成と活動の流れ、そして学習活動の評価をあわせて考察する。

① 児童の実態と音楽づくりに興味を持ってかかわれるような題材の構成

高学年になると、音の重なりがつくるひびき、すなわちハーモニーの美しさが音楽の楽しさ、おもしろさの大切な要素であることは十分感じ取れると思われる。またこれまでに何度も合唱や合奏でその学習を経験してきている。しかし、子どもはそのような場面で具体的にはどれほど音の重なりを意識しているか、またそれを美しいものにつくりあげていく手だてを知っているかを「風になって」の二部合唱における話し合いからみることにした。多くの子どもの意見は以下のようなものであった。



「風になって」二部合唱の様子

- 「追いかけるように歌うところは歌いやすい」  
(模倣進行 譜1)
- 「重なっているところはつられて歌いにくい」  
(3度、6度などの和声進行 譜2)
- 「音が重なっているところは、うまく歌えるときれいだ」

譜1

譜2

このような感想や、日頃楽譜を意識せず、歌詞を見ながら歌い、自分のパートの旋律線はもっぱら耳でおぼえる子が多いことから考えても、実際には音の重なりや曲のつくりについてはあまり意識していないと思われる。

そこで、音の重なりや曲のつくりにこだわって表現や鑑賞の活動を行い、練習の仕方を工夫させるため、本教材では次のような形で題材とかかわらせることにした。

- ・ 6つの小グループで演奏する。
- ・ 6グループがそれぞれに別アレンジの楽譜に取り組む（譜3A~F、いずれも曲頭部分）。
- ・ どの楽譜も和声進行、楽器編成は同じものとする（ソプラノ1・2、アルトの3パート各2名）。

クラス全体での二部合唱を経てグループでのリコーダーアンサンブルへと進めることで、学習の課題意識が定着した。また、グループごとに別個のアレンジ楽譜に取り組ませたことで、その曲に主体的にかかわろうとする意識が高まった。ほとんどの子の意見が次のように一致したことは音楽活動に主体的に取り組もうという意気込みの表れとも考えられる。

「自分たちの曲が仕上がるまで、  
他のグループに聴かせたくない。」

このような思いも大切にしながら、既習事項（アルトリコーダーの運指、反復記号と演奏順など）、新出事項（井ソ、トリル奏法など）を一斉学習で確認し、グループごとの練習に入った。

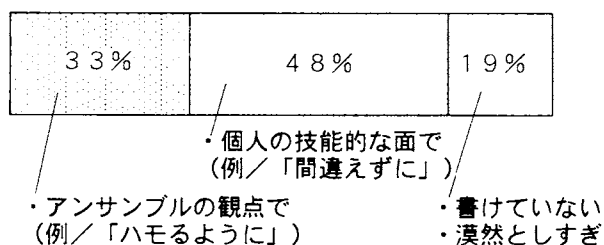
やはり意欲付けと子どもの技能の両方を考慮した題材の構成と提示の仕方が効果的であると考える。

## ② 曲のつくりに着目したひびきの聴き合いとそれをいかした表現の仕方と練習

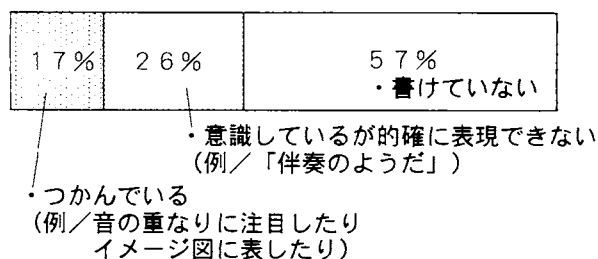
前述の主体的な活動意欲が、曲のつくりの理解や練習の工夫に結びつくかどうか次が重要となってくる。

そこで、一人一人の持つカードには、学習のめあてや練習のふりかえりだけでなく、曲のつくりのとらえや、それをふまえた練習のポイントを記述する欄も設けた。そして書かれた内容から、本題材のねらいに即した音楽づくりの意識を調べてみることにした。以下のグラフが子どもの記述を集約したものである。

この段階では、ひびきの特徴（三声のつくり）を意識す  
グラフ1. 自分なりの目標をもっているか（書けているか）



グラフ2. 曲のつくりをつかめているか（書けているか）



譜3A

指導書等に掲載された3声譜

譜3B

アルトのオブリガート

譜3C

ソプラノ2声とアルトの裏拍

譜3D

ソプラノ2とアルトで伴奏音型

譜3E

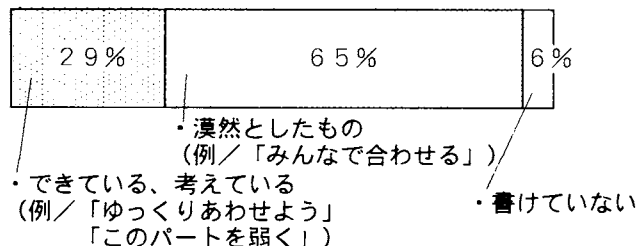
アルトによる旋律

譜3F

音の重なりによる旋律線

ることは子どもたちには難しかったと判断できる。よって個々のめあてはアンサンブルの美しさを追求することより、とにかく「自分のパートをふけるようにする」ことが意識の中心であった。全体的に見れば、練習の視点をはっきりとつかめていない子が大多数であることがグラフ3からも読みとれる。

グラフ3. 練習の工夫をしようとしているか(書けているか)

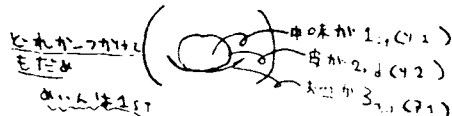


それでも三つのパートの構造を簡単に表現したイメージ図や(資料1)、次のような子どもの言葉(カードやつぶやき)の中からは音の重なりを意識している様子が認められる。

- 「他のパートにあわせて音量に気をつける」
- 「きれいな音を出して、すばらしいハーモニーをつくる」
- 「このパートは音を押しえ気味にしよう」
- 「メロディーのパートがしっかり聞こえるようにしよう」

資料1

シュークリーム方法



結果的に、曲のつくりを理解し、よりひびきを美しいものにするための手だてをうまく見つけられないままに、最初のうちは自分たちで1曲仕上げたいという気持ちだけで練習を始めることになった。そして三つのパートからなる曲のつくりを意識している子がいても、いざ練習になると、漫然とした繰り返し練習に終始しがちであった。グラフ3はそのことを明白に示していると言えよう。

練習を進めるにあたっては、空き教室、ランチルーム等を活用して、グループごとに練習場所を確保した。教師は時間を区切って各場所をまわり、技能面でのアドバイスのみでなく、「メロディはどのパートだろう」「伴奏パートのリズムや速さを正確に」などと、曲のつくりや表現方法に気づかせるような助言も行った。

しかし他のグループや多くの友だちとかがかわりがない分だけ支援としては弱く、聴き合いや話し合いを自分たちの表現に生かしていくことが、やはりどうしても必要となった。そこで次のような場を設定することにした。

- 各グループが曲頭の一部分のみ演奏し、聴き合う。
- 演奏された部分のひびきと提示したその部分の楽譜をもとに、曲のつくりや表現方法について話し合う。
- 話し合われた意見を参考に、表現の仕方を考え、全曲の練習をすすめる。

このうち、曲の冒頭4小節に絞って演奏し聴き合ったのは、そこが曲を構成する基礎的な単位となる部分であること、無理なく演奏できること、同じ箇所を集中して聴き合うことで、曲のつくりをとらえやすいと考えられることがその理由である。また演奏順は明快さや対比性などを考慮して教師側で意図的に指定した。以下は話し合いの内容の一部である。

T / 友だちの演奏を聴きながら、特に主旋律はどこから聞こえてくるだろうかということに気をつけて、曲のつくりを考えましょう。

(譜3Dの演奏を聴いて)

A児/主旋律を吹いているのがNさん、Kさんとわかった。

B児/アルトリコーダーは主旋律でない、かざりかな?

D児/Mさん、Iさんは主旋律の伴奏みたい。

T / 下のパート2つは伴奏って言うていいかな。

Kさんはカードにこんな図(資料2)を書いてあったよ。主旋律以外の人、やってごらん。

E児/アルトリコーダーは音をのばすようにしていた。

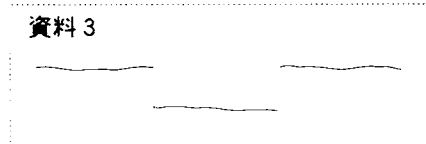
資料2



(譜3 Aの演奏を聴いて)

- T / どうだろう。  
C / うん、いい。  
T / Yさんはこういう図であらわしていたよ(資料3)。  
どんな表現をしようとしていたんだろう？  
F児/音の間に音が入っているところをちゃんとふく。  
T / 主旋律の間の音を大事に、だね。

資料3



(譜3 Cの演奏を聴いて)

- C / メロディになって聞こえない！  
T / よく聞こえないっていう人が多いけど、  
どうしたらいい？  
G児/主旋律が目立つようにすればいい。  
T / (楽譜を示して) ソプラノ2だけ  
ふいてみて。  
H児/これはニセのメロディ。ニセメロ。  
J児/アルトリコーダーは弱くていい。



グループごとの部分演奏聴き合い

(譜3 Fの演奏を聴いて)

- C / よくわからない！もう1回。  
T / 「ミドラファー」っていうメロディが  
聞こえましたか？(少ない)  
C / うーん、聞こえただけど・・・。  
T / ミドラファーの「ミ」はどこ？(以下提示した楽譜に書き込みながら確認)  
L児/わかった！みんなで主旋律を吹くんだから、その音がはっきり聞こえるようにすればいい。

ここでの話し合いにみられるように、集中的に同じ箇所を聴き合うことで三つのパートのつくりについては着目できたと言える。しかし、最初に「主旋律はどこからきこえてくるか」と教師が尋ねたのに対し、話し合いが進んでいくうちに他のパートの役割に注目してみたり、あるパートだけをとりだして演奏したりするという流れになった。これは話し合いの焦点がずれたとみるより、むしろ焦点的な課題から音楽づくりの上で必然的に視点が広がっていったものと考えられる。またわずか4小節とはいえ正確に合わせることでできていないグループの演奏では、聴き手が曲のつくりをつかむには十分な表現に至らず、やはり技能的な面も無視できない要素であると言える。

この活動の後、友だちの意見や教師の助言を参考に、どのような表現をめざすかをもう一度グループで考え、カードに書いて次の練習へと進んだ。

ここでは「アルトリコーダーのメロディを引き出すためにソプラノパートは弱めにふく」「ソプラノ2とアルトは二つで一つみたいなものだから(S1)+(S2&A)となるように」などと曲のつくりを考慮した表現方法をめざすグループや、テンポを落として正確に合わせようとしたり、グループ内で互いの音を聴き合ったりするように練習方法を工夫するグループが見られるようになった。



グループごとの練習

以上のことから、曲のつくり注目した聴き合いの場を設定したことで、自分たちなりのこだわりをもって、表現の仕方や練習方法を工夫するというめざす子どもの姿に迫ることができた。また、最初の「1曲仕上げたい」というだけの意欲から、工夫しながら音楽をつくりあげていくことのおもしろさを感じることができた子が少なくなかった。

### ③ 自分の表現に自信を持たせるような評価

ここまで述べてきたように曲のアレンジや練習の過程がそれぞれ違っていても、自分たちなりの取り組みに満足感を持たせ、さらには次なる音楽活動の自信へと高めていくためには、その

学習活動に対する評価が大切になってくる。

子どもたちに自分の表現に自信を持たせるような具体的な評価の手だてとして、この実践では次のようなことを行った。

- ・自己評価 …………… 練習カードへの記録を中心に
- ・相互評価 …………… グループ内やグループ間相互の聴き合いや話し合いを中心に
- ・教師による評価 …… 個々の児童の観察や支援、練習カードへの記録を中心に

一人一人に持たせたカードには、記録すること自体が子どもにとって負担にならないように配慮し、毎時間の練習のポイントについては短い記述で、またふりかえりについては★の数（5つの☆の塗りつぶし）で記録させた。

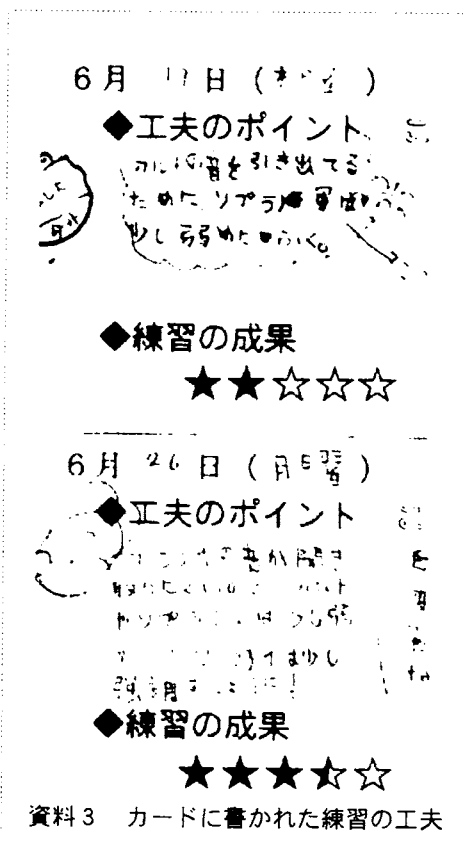
相互評価については②で述べた活動の内容がそのまま具体的な実践である。やはり子どもの当初の意識、すなわち「他のグループに聴かれずに自分たちだけで一曲仕上げたい」という思いだけでなく、友だちの演奏を聴き合うなかでの「ここはこうしたらよい」というような相互評価こそ音楽活動に必要であることを実践を通して確かめることができた。またこの活動での相互評価の場面では、曲の一部分だけとはいえ子どもが緊張感や集中力を持って演奏し、聴く（見る）ことになったが、緊張感や集中力といったものも子どもの音楽活動においては表現をよりよいものにしていくために役立つと考える。

言うまでもなく、評価活動は、授業を設計する教師の側にもフィードバックされるべきものである。この実践であてはめるなら、一人一人への支援の材料であるカードも、クラス全体のものを集約することで学習集団としての特長や課題の適切さを判断する材料になった。また、練習の様子や話し合いの内容を観察することあわせると、「どこにつまずきがあるか」「次にどのような支援が必要か」をつかむことができ、その後の活動計画を適宜軌道修正しながら、効果的に学習を進めることができた。

以上のような評価活動を積み重ね、学習活動の終了後の6年生全員に対するアンケートでは60%の子が「むずかしかったが楽しかった」（「うまくできて楽しかった」は35%、「むずかしかった」は5%）と答えている。このことから、子どもが自分の表現活動に概ね満足感をもつことはできたものと考えられる。その一方、ひびきの聴き合いを重点にして、より美しいものにするための工夫やこだわりのある音楽活動をめざしながらも、楽譜とのかかわり、個々の技能、グループ編成の方法なども検討すべき点として明らかになった。これからは、題材を工夫し評価を生かし、子どもがこだわりをもって音楽活動にのぞめるような実践を重ねていきたい。

最後に音そのものの記録についてふれる。従来は授業中に演奏を録音し、その場で聴いて次の練習のステップにするといった使われ方がほとんどであったと思われるが、昨今の音楽データもデジタル化が進んだことをふまえ、試験的に子どもたちの演奏をWeb上で保存・公開した。

具体的には、活動の最後におこなった各グループの演奏を収録したうち、いくつかをMP3形式で本校ホームページ（音楽科のページ）に掲載した。克服すべき問題や、具体的な学習活動への活用など検討すべき課題は多いが、いつでもどこでも誰でも聴くことができるという点で、評価の場が大きく広がる可能性を持つものと考えている。



資料3 カードに書かれた練習の工夫